



カット(右) 米国・メトロポリタン美術館
(左) 石澤館長

私が東大を卒業した昭和3年は不況のドン底時代だったことは前号に書きましたが、それにしても私が呆れるほど呑気で迂闊な世間知らずであったことを白状せざるをえません。その当時の私は卒業後すぐ就職する必要に迫られていたのですが、私としては就職を人に依頼するのは、ちゃんと卒業してから始めてするべきだと考えていたものです。卒業式は3月31日に新装の安田講堂で全学部合同で行われました。その日は私の誕生日でもあり、また考えてみたら小学校以来まだ一度も卒業式というものに出席したことがなかったのも、少しは好奇心もあって最後の卒業式に出席したのです。その頃はもう陛下の行幸はありませんでしたが、なかなか盛大で、小野塚総長から各学部の総代一人ずつに学部全体の卒業証書を恭々しく渡されたのを覚えています。安田講堂に入ったのはその日が最初で、それ以後入ったこともありませんが、大講堂の中央壇の壁面には小杉末醒画伯の恐らく畢生の大作というべき「泉」という画題の油絵が壁画として飾られていました。先年の大学紛争であれ絵がどうなったか、いつも気になっていましたが、どの新聞の記事にも壁画のことは出ていなかったようです。

さて、いよいよ4月になって運まきながら就職をお願いしに数人の恩師の方々をお訪ねしました。その中のお一人の一高の名物教授、菅虎雄先生(号・陵雲)をお願いに行きましたら、先生は「君は美術史をやったのだから矢代君に会ったらいだろう。その時は忘れずに前から約束してある絵を早く書いてくれるように催促してくれ。忘れちゃダメだよ」と念を押されてから御紹介の名刺を下さしました。それをもって、間もなく大森にお住いの矢代先生をお訪ねしましたら、まるで同輩の友人にでも対するようにくだけた調子で気持よく迎えていただき、つい遅くまでお邪魔してしまったのですが、菅先生からのご伝言を申し上げたら矢代先生からは逆に「今度君が菅先生にお会いしたらお約束の書を早く下さって、そうお伝えしてくれ給え」、と言われました。この菅先

矢代幸雄先生と私 (その2)

大和文華館館長 石澤 正 男

生は夏目漱石や正岡子規と同期の方で、一高では独逸語の先生でしたが、優れた書家として知られていた方です。芥川龍之介の小説のいくつかは、題名を先生にお願いされたものでした。一方矢代先生は幼年時代から絵がお好きで、大学では英文学を専攻され、卒業の時には恩賜の銀時計をもらったほどの秀才ですが、在学中に水彩画も本格的に学ばれ、たまたま文展(文部省美術展覧会のこと)に出品された「赤い日傘」という題の作品が美事に入選されたので、帝大の学生が文展に入選したということで、新聞の社会面のトップ記事に書かれたものでした。そんなことで菅先生と矢代先生の間に書と絵の交換という約束が出来たらしいのですが、このお約束は残念ながら遂に実現せず終ってしまいました。話が大幅脱線してしまいましたが、当時矢代先生は美校教授としての本職の他に、故黒田清輝画伯の遺志と遺産によって建設されることに決定した「美術研究所」(現在の東京国立文化財研究所の前身)の設立準備に専念されておられた時でした。その時のお話では「これが自分の思うように出来たら、君達にも手伝わってもらえるのだが、大分先の事になる予定なのでね」ということでした。

その後、私は生活のため暫く都落ちをしていましたら、或る日、これも大先輩の丸尾彰三郎先生(当時唯一人の文部省国宝鑑査官の地位にあった方で、日本彫刻史の第一人者)からお手紙を頂戴しました。それによると、「今度ニューヨークのメトロポリタン美術館の極東美術部長のアラン・ブリースト君からの手紙で、若い日本人の美術史専門家を正式館員として採用できることになり、美校の矢代教授が人選を委任された。しかし矢代教授は西洋美術史専門で日本美術史の方の事情は判らないので、自分が人選を任されることになった。そこで君を推薦したいと思うが、ニューヨークへ行ってみる気はないか。至急返事を頼む」ということなのです。これが前号に書いた「私にもたらされた全く思いもかけぬ吉報」の内容でした。それから先はすべてが順調に運び、私は矢代先生が開所準備に忙殺しておられた美術研究所の開所式(昭和5年10月15日)に先立って未知の世界へ飛び出して行ったのです。ニューヨークから帰国して、当時の美校や、続いて美術研究所に勤務することになったのも、矢代先生のご推薦によるもので、その後も先生の厚い知遇にどれほど浴したか、測り知れない気がします。矢代先生はズバ抜けた発想の持主で、それが創業の際に最もよく発揮されたことは、創建当初の美術研究所や現在の大和文華館の場合に充分窺われます。また先生は夢の多い方で、私にもいくつかの夢の実現を託されました。私も私なりに夢はもっていますので、これからは先生の夢と私自身の夢が、少しでも多く実現されるように努力したいと願っています。

季刊 美のたより No.17

昭和46年 5月1日

発行 大和文華館